

資本が文化をこわす

明治生まれの学者の警世

恩讐の彼方

昭和五十六年三月初旬のことだった。その日、経済社会学者の^{とのうえ}渡植彦太郎を

訪ねて、一人の教え子が伊予松山にやって来た。李杜鉉^{りとげん}という初老の紳士である。

李はながらく、ソウル大学の民俗学校学教授であったが、この年、国立民族学博物館の客員教授として日本に招かれ、大阪に居を構えたばかりであった。来日にともなう雑務が一区切りしたかれは、懐旧の思いおさえがたく、恩師にあいにきたのである。

李が生まれ育ったのは、現在の北朝鮮の最北端で豆満江の中流域にひらけた

^{かいねい}会寧という小さな^{むら}邑である。戦前、日本の軍部は満州と国境をへだてる豆満江の支流に面したこの邑に、歩兵、工兵、飛行の三隊を常駐させ、北境警備の拠点にしていた。材木と炭坑の町から軍都になった会寧には、日本がつくった朝鮮人だけの小学校があり、ここで優秀な生徒が年に数名、日本の子弟がかよう公立の商業学校へ進学した。



材木商の家に育った李は、昭和十三年春、この北朝鮮の小さな商業学校へ入学し、校長だった渡植に三年間、学問に親しむことの^{たの}愉しさを教わったのである。

一方、校長の渡植にとって、会寧ですごした五年間は、教育者としての愉しさはあったものの、学問の世界から遠く離れてしまったという寂しさをぬぐいさることのできないうっ屈した時代であった。

李の入学より三年前の昭和十年、京城高等商業学校の教授だった渡植は、朝鮮総督府学務課に呼び出され、「北鮮の学校を立て直してくれ」と命ぜられる。しかし、それは表向きのこと内実は、学内の派閥争いのとぼっちり人事だった。頭を冷やしてこい、ということである。耳にしたこともない商業学校の校長への左遷という事態に直面し、まだ三十五歳という若さの渡植は迷った末、母校の大学のゼミでひとり、カント哲学の講義を受け、私淑していた天野貞祐へ相談の手紙を書いた。京都帝大にいた天野はすぐ返事をよこし、「教育もおも

しろいから、しばらくはやってみるがよい」と、会寧行きを奨めた。

赴任した渡植は、まず教師の陣容の充実を図った。各校でもてあましている教師をつぎつぎによび寄せ、彼らの流儀で授業をさせ、それが生徒の評判となった。学校は実業科目よりも中等学校の科目の教育に力を注ぎ、国語、数学、英語の教科書は内地の中学校のものを使用した。活気がよみがえった学校の評判はすぐに広まり、北鮮と満州一帯の中産階級の子弟がどっとおし寄せられるようになり、李が入学した年の競争率は十六倍にもなっていた。

李は一年のとき、渡植の修身の授業を受けた。教科書は一度もひらくことがなかった。校長は、社会科学の教養的な知識をイガグリ頭の少年たちにわかりやすく語った。

李は二年になると、自ら申しでて、校長室の掃除当番になった。校長室にはふだんみることもない本がたくさん置いてあるという噂だったからだ。その噂のとおり、書棚にはたくさんの書物がならんでいた。岩波全書とあとは洋書で、英語が大半だったが、李にとって初めてみる横文字の本もある。毎日、掃除をしながら、書棚の本をながめている内にふと手がのび、ずっしり重い洋書の一冊を手にし、なかを開けた。掃除仲間も肩ごしからのぞきこむ。一行も読めはしなかったが、洋書を手をしているだけで、戦慄にも似た興奮に襲われた。李がこわごわページをめくっていると、渡植が校長室へ帰ってきた。



渡植は李の手から本をとりあげ、そして、すらすら読んでみせた。李はあとで知ったのだが、それはデューイの教育学の一節だった。読みたい本があったら、どれでも持っていくがいい、と校長は生徒たちにいった。

あんのんな銀行員にならずに、多難な学問の道を志したのは、渡植との出会いがあったからだ、と李は信じている。校長室の本は借りずじまいになったが、李が京城帝大の予科へ進学したいと志望を伝えたとき、渡植はウェブスターの英々辞典を植民地の教え子へプレゼントした。

渡植と李杜鉉の初めての再会は、昭和四十三年の春であった。この年、東京大学に客員教授として招かれた李は、荷解きも終わらないうちに、当時、神奈川大学へ勤めていた渡植を横浜の自宅へ訪ねている。

かつての植民地の弟子が、旧師にあう。

「^{おんしゅう}恩讐の彼方」という思いも去来し、自宅へ向かう坂道を登りながら、李は無量であった。渡植はことのほか喜び、李に青灰色の会寧焼の茶わんを与えた。

再会の記念だった。以来、帰ることも行くことも許されない故郷を、李は青地の茶わんを手にし、ながめることで^{しの}偲んだ。

それから十三年後のこの日、岡の斜面のみかん畑をいくつもぬけて、李を乗せた車は小高い山ぎわのひなびた湯治場へついた。建物の入り口の上に「権現温泉」とあり、その看板の下にいた渡植夫妻が、遠来の訪問者の方へいそいそと近づいてきた。

神奈川大学時代に再婚した香誉子夫人の里がこの温泉のすぐ近くだった。渡植は昭和四十四年に横浜を切りあげ、夫人の郷里の一隅で暮らしていたのである。

夜遅くまで、話はずきることがなかった。渡植は李が持参した韓国の^{こくゆう}黒釉の小瓶が気に入り、押入から取り出した会寧の茶わんと古九谷の小皿も茶卓にならべ、いとおしそうにながめるのだった。

話題は自然、古陶のことが多くなった。

渡植は柳宗悦の民芸論をほめ、民芸には名もない庶民が代々継承してきた技能が息づいている。民芸の美しさはそのような技能知がいかされる人間の本来的な労働が作りだしたものであり、技術の発達が生産物から民芸美を奪ってしまった、となげくのだった。



明治生まれの老学者にとって、今日の資本制社会に氾濫する商品は、どれひとつとして品がなく、うすっぺらで便益という仮面をかぶったまがいものに見えるのである。それに比べ、古陶のように、庶民の生活のなかから職人たちの技と誇りで作られたものには、使う者が心を通わせたいような価値があるというのである。

渡植は十数年来あたためてきたこのような問題意識を論文にまとめ、勤めている松山商科大学（現松山大学）の論叢に発表してきた。各地の教え子にもそのつど、抜き刷りを送っていたが、かれらがお互いに声をかけあって、そろそろ出版してはどうかということになり、一橋大学にいる田中正司は恩師の論文を二三の出版社にもちこんだ。さらに出版の足しにと、各地の教え子から相当な金銭の支援が老学者のもとに届いていた。しかし、経済学者で歌人としても

その名を知られた大熊信行から、「ドサ回りの学者」だと^{やゆ}揶揄されたこともある渡植はその言葉どおり、地方暮らしが永く中央の学会では無名に等しい老学者だった。田中の世話も実らず、出版の話はいつか沙汰止みとなったまま歳月が流れていたのだった。

渡植はこうした近況を李にも話し、近代が産み出した資本制社会は人々から

よき文化を奪い、現代人の精神をいっそう荒廃させている。それでこのことについてあといくつか論文を書いたら、とりまとめて私家版にし、上梓するつもりでいる、と結んだ。

翌日、老学者は愛弟子とつれだって、郊外の小さな神社を訪ねた。伊予の豪族だった河野氏が平安時代の初期に「予州吉原」という処に勧請し崇敬したと伝えられる神社で、還熊八幡という。社殿は慶長年間に毛利勢の家臣が伊予に来襲した際に焼け落ちたので、いまの場所へ遷座したが、このとき、御神体とともに護持された御神面があるということを渡植が伝え聞き、よい機会だからと李を誘ったのである。



宮司の住まいの座敷で、二人はその古い仮面をみせてもらった。朱色の胡粉がところどころにわずかに残る木造のへし口の面は、右目が下向き、左目は上向きで肉は厚く、技法は幼稚だが、室町時代の神楽面の形式が守られている。裏に銘文が入っていた。「予州吉原返熊 寛正三年六月日 左衛五郎 盛真」祈願成就のため制作し献納されたものらしかった。室町時代の面で年号があるのはきわめてめずらしい、と李は説明し、能面へ至る研究資料として貴重なものを見せていただけたと感謝した。すると宮司が、この面と一対のものと伝えられる仮面が四国遍路五十一番札所の石手寺にも所蔵されているというので、二人はそれも見に行った。

石手寺の仮面は保存状態はよかったが、肝心の銘文は消えうせていた。造りは素朴で口は大きくひらいている。形式からみて、民間で使われた神楽面に違いなかった。ただ神社のものと一対で同じ作者の手によるものかどうか、それは確かめようがなかった。

広島へ渡る船の時刻に、まだいくらか時間の余裕があった。二人は寺の境内のベンチに並んで腰をおろした。



本堂の ^{いらか} 藪の奥の森で、うぐいすが鳴いている。白装束のお遍路が鈴の音を響かせながら境内を歩いている。

よいものをみて気分が高まっていた。

日だまりのなかで渡植は仮面を鑑賞した感想を語り、さらに持論を次のように熱っぽく展開した。

職人が自分の生活集団のなかで作り上げたものは、それを鑑賞したり使ったりする人たちの時間を蓄積していく。商品生産が本格的に始まる前に制作され、

今日に伝わる民具や建築物が美しいのは、それらがみなそのような時間をもつからではないか。生産物が文化的な価値をもつようになるには、こうした時間の蓄積が必要である。

だが、今日の資本制社会が生産するおびただしい商品には、使用者の側の時間の蓄積は予定されていない。耐久消費財といっても、本当に何十年もの使用に耐えるようでは、生産者の企業は困ったことになる。資本制社会の企業にとっては、使用者との交通をとおした文化的価値の生産は二の次であって、貨幣的価値の獲得が何よりも優先される。人間の労働もこのような目標のもとに管理され評価されている。

ここ百年余りとくに戦後の日本社会は、あらゆる分野にまで、こうした資本の論理に支配されてしまった。このような社会が、はたして後世に誇れるような文化を造りだせるだろうか。

李は拝聴し少年のころとかわらない眼差しで老学者をみつめながら、恩師の思想の理解者が数多く現われることを願うのだった。

やがて、港へ行く時刻になった。

タクシーで石手寺から道後へでた。

李が恩師の老軀をかばって道後の駅で別れをつげたが、渡植はどうしても港まで送りたいといってきかなかつた。八十をこえた者が六十の弟子と学問の話ができるのはめったにないことだから、できるだけ話していたいと老学者はいうのであつた。

港の待合室で渡植は李に私家版の本ができたなら贈ることを約し、船内に去っていく弟子を見送るとバスでひとり帰路についた。

バスにゆられながら、渡植はぽっかりあいた空洞を昔日の思い出で満たしていった。

そして、車窓から^{つい}終の住みかとなった権現のみかん山が浅い春の夕陽に染まっているのを目にするころ、老学者は李が会寧商業へ入学した昭和十三年春のことを思いだしていた。

この春、渡植は^{ぼくぎやく}莫逆の友の訃報に接し、数日だれにも会わず布団にもぐりこんで過ごしたことがあつた。

大学のゼミで知りあつてから、いつも恋愛にも似た友情を互いに抱きつづけてきたその友は哲学者の本多謙三だつた。

本多は昭和の初期、三木清や戸坂潤らと肩をならべ将来を嘱望されていたが、健康に恵まれず、四十歳の若さで他界した。西田幾多郎は死後に出版された本多の論文集『哲学と経済』に序を寄せ、夭折を惜しみ、「常に自ら考えた君の論

文は、人に何物かを與えるであろう」と書いた。

本多は大正デモクラシー運動に哲学的な基礎を与え、また「西田哲学」の呼称の生みの親でもある経済哲学者の左右田喜一郎の弟子として学会へ登場し、フッサールの理解者として高い評価を受けていた。

その本多はいつも口癖のように、哲学はただ専門家の間にだけ通ずる言葉でもって競う解釈学であってはならず、それぞれの時代に処する世界観を人々に提供していくものでなければならない、と語ってやまない思想家でもあった。

夕陽に映える権現の小高いみかん山をながめながら、いま本多が生きておれば、かれはどのような警世の一文を草するだろうかと思ふのだった。

これから本にまとめようとしている自分の考えも本多ならよく理解し、さらに深く掘りさげ、もっとわかりやすい表現で世に問うことであろう。本多のいない今日、渡植はいささかの使命を感じてはいたが、私家版の上梓という趣味的な方法でしかこれに応えられない状況は、さすがに情けなく本多に対して不明を恥じ入る気持ちがあった。

しかし、人の世の旅路には思いがけないあいが用意されているからおもしろい。

このときから五年後、すでに八十七歳になっていた渡植は、かれにとって本多謙三の再来ともいふべき少壮の哲学者・内山節にであうことになる。

昭和六十一年春、渡植は内山との直接のあいをとおして、かれが永い月日をかけて築きあげてきた思想が中央の出版社から三部作の単行本にまとめられ、本格的に世に問われることになった。



内山 節